

幼児の向社会的行動を促進する大人の関わり方に関する一考察

長谷川, 沙羅
九州大学大学院

井上, 久美子
西南学院大学

<https://doi.org/10.15017/4774156>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 12, pp.7-12, 2021-03-15. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター

バージョン：

権利関係：



幼児の向社会的行動を促進する大人の関わり方に関する一考察

長谷川沙羅 九州大学大学院 / 井上久美子 西南学院大学

要約

本研究の目的は、幼児の向社会的行動を促進する要因について検討することであった。研究1では、保育場において幼児の向社会的行動を動機別に分類することを目的とした。その結果、外発的向社会的行動・内発的向社会的行動・葛藤ありの向社会的行動の3つに分類され、葛藤場が幼児の向社会的性の発達に重要な役割を果たすと考えられた。研究2では、自分の欲求と相手の要求との間で葛藤するような場面における向社会的行動について、大人の声かけの違いによる影響を実験により検討した。大人の声かけは、相手の気持ちを想像させるような「共感的声かけ」と大人からの要求に従うように指示する「指示的声かけ」の2種類であった。その結果、「共感的声かけ」を行ったグループでは幼児全員がポジティブな感情を示したのに対し、「指示的声かけ」を行ったグループでは向社会的行動をとった幼児はポジティブな感情を示さなかった。よって、共感的声かけは向社会的行動を促進する可能性があることが示唆された。

キーワード：幼児、向社会的行動、促進要因

I 問題と目的

社会的動物である人間は、他者との友好な関係を築くことが求められ、その方法を私たちは他者との関わりの中から学んでいく。子どもの場合、ある程度のわがままであれば養育者に受け入れられることも多いと考えられるが、保育園などの保育施設では、集団という場の中で、先生の言うことを聞いたり他児と玩具を譲り合わなければならなかったりと、常に自分本位な態度ではいられないことに気づくだろう。その結果、幼児にとって、集団の中で自分がどのようにふるまうべきかを身に付ける機会になっていくことであろう。そのため、保育施設における保育士や他児とどのような関わりを持つかが、子どもの向社会的性の発達において重要であると考えられる。

他者との有効な関係作りのために必要となるスキルは様々あるが、その1つに向社会的行動がある。向社会的行動には援助行動や分与行動、他人を慰める行動といったものがある(Eisenberg, 1992/1995)。向社会的行動の定義について、菊池(1984)は研究の内容によって柔軟に考える必要性を論じたうえで、欠かせない条件として、他人への援助行動であり、ある種のコスト(損失)を伴ったもの、という2点を挙げている。本研究ではこの条件を満たしたものを向社会的行動とし、幼児の向社会的行動を促進する大人の関わり方について検討する。

菊池(1983)は向社会的行動に影響を与えるものの1つに文化的変数を挙げている。文化的変数とは向社会的性に関する文化的要因であり、互惠性の規範はその1つである(菊池, 1983)。子どもは集団生活をする中で、例えば玩具を友達から貸してもらったら、次は自分が貸してあげるといった互惠性の規範を身に付ける。長谷川(2001)は、進化心理学では、ヒトの心の働きの基本は、進化で適応的に形成された情報処理・意思決定アルゴリズムから成り立っていると論じている。そのため、互惠性の規範は進化の過程で身に付いた合理的な規範であると考えられる。一方で、幼児期は心の理論の発達段階であることから(鈴木ら, 2004)、幼児がとった向社会的行動の動機を考えると、相手のためというよりも、自分への見返りを期待したものである場合も少なくないであろう。例えば、清水(2010)は幼児・児童(5~8歳)を対象に、車に乗った見知らぬ人から「駅への道がわからないので一緒に行ってほしい」と言われた際に、子どもがどう行動判断するかを検討している。実験では「駅まで一緒に行く/行かない」と

いう選択肢を問う危険回避課題と、「道を教える/教えない」という向社会的行動課題の2つを子どもたちに尋ね、どちらを優先させるか調査している。その結果、子ども自身も駅に行きたいと思っている場合(一致条件)は、「一緒について行く・道を教える」と答える子どもが多かったが、その子らに行動の理由について尋ねると、「車の方が駅へ早くつくから」という欲求の方向性の一致度について言及したものが多数であった。このことから、子どもは必ずしも向社会的動機から向社会的行動をとろうとするわけでないことが示唆されている。

また、幼児の向社会的行動に影響を与える動機は、幼児が置かれている状況によって変わることもある。石橋(1992)は幼児を対象に、実験中に貰ったシールを可哀想な子どもに分与する意思があるかのみを問う「架空の分与可能場面」と、分与する意思があれば可哀想な子どもの箱にシールを入れることを求める「実際の分与可能場面」を設定し、両場面における分与の動機などを比較している。その結果、架空の分与可能場面では「お父さんが死んでかわいそう」といった共感的志向が幼児の分与行動を促すことが示唆されている。一方、架空の分与可能場面において分与すると回答しながら、実際の分与可能場面では分与しなかった幼児も見られ、その分与しなかった理由として「全部自分が欲しいから」といった自己の損得への関心に基づく動機が述べられており(石橋, 1992)、このことから架空の場面と現実場面における向社会的行動のとり方や、意思決定に影響を与える動機の違いがある可能性が窺える。よって、幼児の向社会的行動を考えるうえでは、普段の生活場面における向社会的行動の動機に注目する必要があると考えられる。そこで、本研究では幼児の保育施設における生活場面において見られた向社会的行動に注目し、検討を行う。

さらに、幼児の向社会的行動の動機は、周りの大人の声かけによっても影響を受けるであろう。大人の声かけが幼児への向社会的行動を直接的に促すような指示的なものであるか、もしくは幼児自身に自分が取るべき行動を考えることを促すような声かけであるかによっても、幼児の向社会的行動の動機は変わってくるのではないだろうか。松永・大久保(2012)は、幼児を対象に保育士の声かけによる他児認知への影響を検討しており、保育者の声かけの内容が幼児の他児への好意度に影響を与えると論じている。また、幼児の遊び行動と保育士の声かけの関係

を検討した大久保・岩崎 (2007) は、保育士の声かけが幼児の気持ちや表情、行動などに影響を与えていることを確認し、保育士の声かけが幼児の心身の発育・発達において重要な役割を担っていると論じている。このように、幼児期は保育士といった大人の声かけの影響を受け、認知や行動を決定する可能性がある時期であることを考えると、このような周りの大人の声かけのあり方について検討することも重要であろう。

そこで本研究では、幼児を対象に、自由遊び場面を含めたあらゆる生活場面において観察された向社会的行動について、その行動をとった背景となる動機について分類を試みる (研究1)。そのうえで、向社会的行動が起こりやすくなると考えられる場面 (限られた数の玩具を幼児間で共同して使う場面) において、幼児が周りの大人からの声かけのあり方によって向社会的行動をとる傾向に違いがあるのか、またそのときの気持ちについて、幼児にインタビューを行うことで、向社会的行動に至る動機を詳細に検討する (研究2)。

II. 研究1 幼児の向社会的行動を促す動機の種類

1. 目的

幼児の向社会的行動の動機は必ずしも向社会的動機からきているわけではない (清水, 2010)。そこで研究1では、幼児がどのような動機から向社会的行動をとるのか、自由遊び場面を含めたあらゆる生活場面を観察し、その動機のあり方を分類することを目的とする。

2. 方法

1) 対象児 福岡県内の2つの保育園 (X保育園とY保育園) に通園する園児のうち、主に2~5歳児クラスの幼児を対象とした。

2) 園の特徴 X保育園の定員は80名であった。特徴として縦割り保育を推進しており、他の園と比べて異年齢児同士の接触が多い点が挙げられる。Y保育園は定員30名とX保育園と比べて規模が小さく、そのため2歳~5歳児はまとめて1クラスとなっており、常に異年齢児の接触があった。

3) 観察時期と時間 2019年5月から9月の間に、各保育園へ週1回、午前中に訪問し、計34回 (X園16回、Y園18回)、約67時間 (X園約40時間、Y園約27時間) 観察した。

4) 観察場面 あらかじめ定めず、自由遊びや読み聞かせ、園外活動や運動会の練習などその時々で決められていたプログラムに同行し、自然に出現した向社会的行動を記録した。

5) 記録法 メモ用紙を常に携帯し、向社会的行動が観察されるたびに記録した。観察・記録はすべて筆者の一人が行った。記録対象児は向社会的行動をとった幼児だけでなく、向社会的行動を受けた幼児、そのやり取りを見ていた幼児 (以下、傍観児と呼ぶ) も含まれる。向社会的行動を誘発するきっかけとなっ

た出来事から行動の結果までを、文脈がわかるように記録した。観察する際には幼児の発言・行動・表情に注目した。

6) 筆者の立場 保育士から筆者は「先生」として園児に紹介された。遊び場面では一緒に遊び、時には指示を出すといった先生という立場で園児と関わることで、向社会的行動場面を園児の近くで観察することが可能であった。

3. 結果と考察

まず、観察によって得られた行動が向社会的行動であるか否かを評定するために、筆者を含む心理学を専攻する大学院生3名で評定した結果、一致率は98.0%であった。不一致であったものは、分類基準を再確認し合意のもとで決定した。その結果、最終的に向社会的行動と評定された行動の生起数は全部で46であった。

次に、向社会的行動と判断された全46事例の行動データを動機別に分類するために、筆者が以下のように分類基準を定義した。まず観察された向社会的行動は、保育士から幼児に「(他児に玩具を) 貸してあげなさい」と言うように①第三者からの明確な声かけがあったことで誘発した向社会的行動と、②第三者からの明確な声かけがなく、とった向社会的行動の2種類に分けられた。前者を「外発的向社会的行動」、後者を「内発的向社会的行動」と名付けた。また、行動を求められた際 (例えば、玩具を貸してほしいと他児から要求された際)、すぐに行動できずに葛藤しているような様子が観察された事例もあった。これは、幼児自身の内発的な意思によって行動したのか、それとも周りの保育士の影響等による外発的なものなのかの判別が難しいものであった。そのため、これを③第三者であるなしに関係なく他者から行動を求められた際にすぐに行動できなかったときの向社会的行動と定義し、「葛藤ありの向社会的行動」と名付け、前述した2つの分類とは区別した。よって幼児の向社会的行動は、外発的向社会的行動・内発的向社会的行動・葛藤ありの向社会的行動の3グループに分類された。

そこで、全46事例の行動データに関して、上記の分類基準に従って筆者を含む前述の評定者3名で分類した結果、91.3%の評定が一致した。不一致であったものは、分類基準を再確認し合意のもとで決定した (Table 1)。

III. 研究2 大人の声かけの違いによる葛藤場面における向社会的行動の動機について

1. 目的

研究1において観察された葛藤ありの向社会的行動の全てが、玩具等をめぐって友達に貸してほしいと要求され、最初はその要求に対して拒否するが、その後相手の要求を受け入れるというものであった。この一連の中で幼児が感じているであろう葛藤が、向社会的性の発達に重要な役割を果たしていると考えられる。そこで、研究2では、自分の欲求と相手の要求との間で葛

Table 1. 幼児の向社会的行動の動機別分類

名称	行動が求められた際の反応時間	行動動機	行動数	定義
外発的 向社会的行動	即時	受動的	9	第三者からの明確な声かけがあったことで誘発した向社会的行動
内発的 向社会的行動	即時	能動的	33	第三者からの明確な声かけがなく、とった向社会的行動
葛藤ありの 向社会的行動	即時ではない	不明	4	第三者であるなしに関係なく他者から行動を求められた際にすぐに行動できなかったときの向社会的行動
合計			46	

藤を感じる場面を取り上げて検討する。その場面としては、幼児が玩具の取り合いが頻発しやすい時期（長濱・高井，2011；利根川，2006）であることを考慮し、限られた数の玩具を幼児間で一緒に使うという場面を設定する。

また、上記のような葛藤場面における周りの大人の関わりも重要になってくるであろう。そこで、石橋（1992）と川島（1980）を参考に、玩具の貸与要求をした幼児に共感するような共感的声かけと、貸与行動を直接的に指示するような指示的な声かけの2種類を行うことで、幼児の向社会的行動のあり方とその時の動機の違いについてインタビューを通して検討する。

2. 方法

1) 参加児 研究1と同様の、福岡県内の2つの保育園（X保育園・Y保育園）の2～5歳児クラスに所属する幼児30名（2歳児クラス2名、4歳児クラス15名、5歳児クラス13名）。以下、「2歳児」とあれば2歳児クラスに所属する幼児のことを指す。

2) 材料 表情当てクイズで用いたものは、H.S.C（包括的スクールカウンセリング研究会：代表 本田恵子/鈴木真理）監修、株式会社クリエイションアカデミー製作の「表情カード（Expression Card）」であった。表情カードは無表情・喜び・不快・悲しみ・驚き・照れを表すものを1枚ずつ選出した。

レゴブロックは参加児に2歳児がいることを考慮して、レゴブロックデュープロ（大きめのレゴブロック）を用いた。本実験では幼児Aが同グループの幼児Bに対して玩具の貸与を要求するような場面が自然に発生しやすいようにレゴブロックの数を少なめにし、レアなレゴブロックを1種類につき1つのみ入れるようにした。その際、レゴブロックの数やその形状・色の種類はグループ間で統一した。記録はビデオやテーブルレコーダー等は使用せず、全行程において手書きメモを作成した。

3) 手続き 実験は各保育園の部屋で行った。参加児は3～4人のグループに分けられ、実験者（筆者）1名と参加児1グループで実施した。Y保育園では在籍する園児の人数の都合上、異年齢児同士を合わせたグループ（2歳児2名と4歳児2名）を1つ作成し、X保育園では同年齢児同士のグループを8つ（4歳児グループ4つ、5歳児グループ4つ）作成した。

本実験は表情当てクイズ、レゴブロック遊び、インタビュー調査の順に実験を進めた。

【表情当てクイズ】 まず参加児全員と表情カードの使用方法を確認するために表情当てクイズを行った。参加児に6種類の表情が描かれている紙を渡し、実験者が発した気持ち（例：「にこにこ、嬉しいな」）と一致する表情カード（例の場合「喜び」を表している表情カード）を指差してもらった。誤った表情を差している幼児がいれば、正答を教えた。それぞれの表情について言及した後、この表情カードは後に再び使用するため、覚えておくように伝えた。

【レゴブロック遊び】 表情当てクイズの後、これから全員で実

験者が持ってきたレゴブロックで遊ぶことを伝えた。遊ぶ際、
1. レゴブロックの数が少ないのでみんなで仲良く遊ぶこと、
2. 友達の玩具が欲しいときは「貸して」と言うこと（黙って取らないこと）、
3. 遊んでいる途中で一人ずつ実験者が呼ぶので、呼ばれたら遊ぶのを中断して実験者のところまで来ることの3点を伝えた。その後、実験者も含め全員で床に輪になりレゴブロック遊びを開始した。

【声かけの種類】 幼児Aの貸与要求を幼児Bが拒否した際に、実験者がBに対して声かけをすることで、Aの要求に応じるようBに促し、Bが要求に応じた場合を「葛藤ありの向社会的行動」とした。幼児に対する声かけは、Aの気持ちを想像させるような共感的声かけ（「Aも〇〇で遊びたそうだよ」）と貸与を強制的に促すような指示的な声かけ（「Aに〇〇を貸してあげなさい」）の2種類であった。以下、幼児Aは玩具の貸与要求をした幼児、幼児BはAから貸与要求を受けた幼児とする。

【インタビュー調査】 インタビュー調査は玩具を貸した幼児、玩具を貸してもらった幼児、傍観児に対して実施した。質問内容は、玩具を貸した理由と、その時の自分の気持ちと相手の気持ちを問うものであった（Table 2）。気持ちを尋ねる質問では、まず自由回答で答えてもらい、その後表情カードを使って答えてもらった。選んだ表情カードと幼児の考える気持ちの一致度を確認するため、カードを選んだ後にその表情カードが表す気持ちを答えてもらい、最後にカード選択の理由を尋ねた。

3. 結果と考察

実験の結果、インタビュー調査まで実施できたのは全9グループ中8グループであった。そのなかで、幼児Aの貸与要求を幼児Bが拒否し、実験者がBに対して声かけをすることで、BがAの要求に応じた場合を葛藤ありの向社会的行動場面とし、分析の対象とした。その分析対象となったのは8グループ中3グループで、内訳は共感的声かけによるものが1グループ、指示的な声かけによるものが2グループであった。残りの5グループは、幼児Aの貸与要求に対して幼児Bがすぐに貸すという内発的向社会的行動（研究1より）場面であった。次に、それぞれの事例から考察したものを記載した。

1) 葛藤ありの向社会的行動場面

葛藤ありの向社会的行動場面となった3グループ中、指示的な声かけを行った1グループは異年齢児混合グループであり、対象となった2歳児から十分なインタビューの回答が得られなかったことから、今回は分析対象から外した。

各事例のレゴブロック遊び中の実験者と幼児の会話を下記に示す。事例には番号をつけており、番号の次に書かれているのは、その事例で登場する幼児である。先頭に向社会的行動をとった幼児、その次に向社会的行動を受けた幼児の順で記載している。また、インタビュー調査の結果はTable 3とTable 4にグループごとにまとめた。

Table 2. インタビュー調査の質問事項

インタビュー児	玩具を貸した幼児 B	玩具を貸してもらった幼児 A	傍観者であった幼児 C
貸与の理由	なぜ、Aに玩具を貸したのか	なぜ、Bは玩具を貸してくれたと思うか	Bはなぜ、Aに玩具を貸してあげたと思うか
その時の自分の気持ち	玩具をAに貸した時、どういう気持ちになったか	玩具をBから貸してもらった時、どういう気持ちになったか	BがAに玩具を貸しているのを見て、どういう気持ちになったか
その時の相手の気持ち	Aは玩具を貸してもらって、どういう気持ちになったと思うか	玩具をAに貸してあげたBは、どういう気持ちになったと思うか	BがAに玩具を貸してあげた時、AとBはそれぞれ、どういう気持ちになったと思うか

【事例1 (共感的声かけ)】 5歳男児Gと5歳男児F

F : 「それで遊びたいなあ」と言って、Gが持っているヒヨコのフィギアを指さす。
 G : 「うーん」と言って下を向く。
 実験者: 「Fもヒヨコで遊びたいみたいだよ」とGへ声をかける。
 G : 「でも…」と言って、下を向いて考え込んでいる様子。
 実験者: 「Fもヒヨコで遊びたいみたいだよ」と再びGへ声をかける。
 G : 「でもこれ、かわいいし…」とブロックをいじりながら言う。
 実験者: 「Fもヒヨコで遊びたいみたいだよ」とさらにGへ声をかける。
 G : 下を向いていて、応答なし。
 (Fが別の玩具で遊び始めてヒヨコへの興味が薄れたため、ここで声かけを終了)

(数分後、再びFがGへ同じ玩具を貸してほしいと要求した場面)

F : 「Gくん、そのヒヨコ貸して」
 G : 「じゃあ、時計が6のところきたら返して」と言ってヒヨコを渡す。
 F : 「ありがとう」

【事例2 (指示的声かけ)】 5歳男児Iと5歳男児H

H : 「Iくんヒヨコかして」
 I : 「えー」
 実験者: 「Iくん、Hくんにヒヨコ貸してあげなさい」
 I : 下を向いて「えー」
 実験者: 「貸してあげなさい」
 I : 少し間があって「じゃあいいよ」と言ってHに渡す。

2) 共感的声かけと指示的声かけによる幼児の注意誘導について

玩具の貸与理由をインタビューしたところ、共感的声かけを行ったグループでは、玩具を貸した幼児Gは「Fが可哀想」、傍観児Eは「Fが欲しかったから」と、玩具を貸してもらった幼児Fの立場にたった回答をしている。また貸してもらったFは、Gが貸してくれた理由として自分が欲しかったからだと回答した (Table 3)。つまり、共感的声かけを行ったグループでは、

Gが貸与行動をとった動機として回答した内容は、貸与した幼児、貸与された幼児、その様子を傍観していた幼児ともにFの貸してもらいたいという気持ちに焦点化したものであった。

これに対して指示的声かけを行ったグループでは、玩具を貸した幼児Iは「こわい、(渡さないとHが) ひっかくから」と、もし貸さなかったら自分に危害が加わるので貸した旨を回答しており、それは自身の心的状態に焦点化されたものであった。また貸してもらった幼児Hは「Iがやさしかったから」、傍観児Jは「Iがいなくなったから」と回答しており、両者とも玩具を貸したIの立場にたった回答をしていた (Table 4)。つまり指示的声かけを行ったグループでは、貸与した幼児、貸与された幼児、それらを傍観していた幼児ともに玩具を貸したIの様子に関する回答となった。

以上のことから、玩具の貸与を要求された場面において、周りの大人の「Aもその玩具で遊びたそうだよ」といった、幼児Aの気持ちを想像させるような共感的声かけを行うと、それを直接言われた幼児Bだけでなく、貸してもらった幼児Aとそれを見ていた周りの幼児にも、要求を伝える幼児の気持ちの理解を促す可能性が考えられる。

一方、「Aにその玩具を貸してあげなさい」といった、指示的声かけの場合、玩具を貸してもらった幼児Aやそれを見ていた周りの幼児は、貸した側の幼児Bの行動に注意が向きやすく、貸してほしい幼児Aの気持ちには注意が向きにくくなる可能性も窺えた。また、玩具を貸した幼児B自身も相手のためを思っただけではなく、自分の損得を重視してしまう可能性も考えられた。しかし、これらのことは、声かけの各条件において、あくまで1事例のみから見られたものであり、今後、調査の対象となる幼児の数を増やして、さらなる検討を行う必要がある。

3) 指示的声かけをされた場合における理由づけの異なる解釈の可能性について

指示的声かけを行ったグループにおいて、玩具の貸与理由を「実験者が貸しなさいと言ったから」のように答える幼児はいなかった (Table 4)。これは、レゴブロック遊びの中で声かけを行った人物とインタビュー調査を実施した人物が同じであったことから、インタビューにおいて、上記のような理由を言いにくかった可能性が考えられる。また、園児は普段から保育士な

Table 3. 事例1「共感的声かけ」におけるインタビュー調査結果 (注)

インタビュー児		G	F	E
行動の種類		貸した	貸してもらった	傍観児
貸与理由		Fがかawaiiそう	ほしいから	Fがほしいから
その時の自分の気持ち	自由回答	うれしそう	うれしい	うれしい
	表情カード	[喜び]	[喜び]	[喜び]
	カード選択理由	×	ヒヨコかしてくれたから	だって僕もほしかったから
その時の相手の気持ち①	想像した相手の幼児	F	G	G
	自由回答	ありがとう	×	悲しい
	表情カード	[照れ]	×	[悲しみ]
その時の相手の気持ち②	カード選択理由	はずかしい	×	とられそう
	想像した相手の幼児	/		F
	自由回答			にっこり
	表情カード			[喜び]
カード選択理由	かしてくれたから			

(注) ×: 「わからない」と返答したもの。□: 選択した表情カードが表す表情。

Table 4. 事例2「指示の声かけ」におけるインタビュー調査結果（注）

インタビュー児		I	H	J
行動の種類		貸した	貸してもらった	傍観児
貸与理由		こわい、(渡さないでHが) ひっかくから	(Iが) やさしかった	(Iが) いらなくなったから
その時の自分の気持ち	自由回答	わすれた	いい気持ち	なんも
	表情カード	[無表情]	[喜び]	[喜び]
	カード選択理由	なんも思わなかった	×	ふつうに遊びたいから
その時の相手の気持ち①	想像した相手の幼児	H	I	I
	自由回答	うれいしに決まってる	×	しらない
	表情カード	[喜び]	[不快]	[無表情]
その時の相手の気持ち②	カード選択理由	人はもらったらうれいしから	そういう顔だった	×
	想像した相手の幼児	/		H
	自由回答			うれいし
	表情カード			[喜び]
カード選択理由	選択理由			

(注) ×：「わからない」と返答したもの。□：選択した表情カードが表す表情。

どの大人の言うことを聞いているため、大人の指示に従うことにあまり抵抗がなく、そのため「指示されたから」という旨の理由を言及しなかった可能性も考えられる。

指示されたということを言語化しなかったものの、玩具を貸した幼児Iは、自らの意思で進んで行動したわけではないことはインタビューの結果から容易に想像できる。まず、Iは玩具を貸した理由を「こわい、ひっかくから」と答えており（Table 4）、これは自分に危害が及ばないようにするために貸したと解釈できる。また、玩具を貸した時の自分の気持ちを「忘れた」、表情カードは[無表情]を選択、カード選択理由として「何も思わなかったから」と答えていることから（Table 4）、貸与したことにあまりポジティブな感情を抱いていないことが推察された。

以上より、Iは玩具を貸したことに対して、内発的に行ったものとは考えにくく、貸さなければ自分が危ないといった理由付けをすることで、自身を納得させようと葛藤していた状況があった様子が推察された。

4) 指示的な声かけと内発的向社会的行動との関連について

事例2において、玩具を貸した幼児Iは自分の感情をニュートラルだと答え、また玩具を貸してもらった幼児Hは、玩具を貸してくれたIの感情を表情カードを使って[不快]だと答えた（Table 4）。傍観児Jも、Iの気持ちをネガティブではないにしろ、ポジティブでもないと答えた（Table 4）。自他ともに玩具を貸した際のIの気持ちをポジティブなものとは評価していなかったことから、Iは自発的に向社会的行動をとったというよりむしろ、実験者の声かけによって「させられた」と感じた可能性が考えられる。そのため、Iの行動は内発的向社会的行動とは言い難いであろう。川島（1980）は、大人が幼児のとった寄付行動を「私がお願いしたからしたのでしょう」のように外的帰属に評価した幼児より、「あなたがしたいからしたのでしょう」のように内的帰属に評価した幼児の方が、寄付行動が適切に学習されると述べている。本実験の場合、大人から向社会的行動の帰属を評価することはしなかったが、幼児Iが自分の行動を内的帰属できていない可能性がインタビュー結果から窺えるため、適切な向社会的行動を学習した可能性が低いことが考えられる。よって、幼児によっては大人の「貸してあげなさい」といっ

た直接的な指示的な声かけはその後の自発的な向社会的行動を促進するとは考えにくい可能性も窺えた。

IV. 総合考察と今後の課題

研究1の結果、幼児の向社会的行動は動機別に外発的向社会的行動、内発的向社会的行動、葛藤ありの向社会的行動の3つに分類された。その結果を基に、研究2では葛藤ありの向社会的行動に注目し、相手の要求と自分の欲求との間で葛藤を感じている幼児に対して指示的な声かけと共感的声かけの2種類の声かけを行うことで、幼児の向社会的行動のあり方がどのように異なるかを検討した。その結果、共感的声かけ条件では、向社会的行動をとった幼児・向社会的行動を受けた幼児・傍観児の三者すべてにおいて、向社会的行動を受けた幼児（貸与要求をした幼児）の気持ちにより注意が向きやすくなる様子が窺えた。また向社会的行動が見られた後のインタビュー調査において、その時の自分の気持ちを問うと、共感的声かけを行ったグループでは三者ともポジティブな感情を示したのに対し、指示的な声かけを行ったグループでは向社会的行動をとった幼児はポジティブな感情を示さなかった。

以上の結果から、自分の欲求と相手の要求との間で葛藤するような場面において、共感的声かけは向社会的行動を促進する可能性がある一方、指示的な声かけは共感的声かけと比べてその可能性は低いことが示唆された。

今後の課題としては、研究1においては、幼児の向社会的行動の分類基準を筆者一人の判断で定義してしまっている点から、恣意的な基準になっている可能性が挙げられる。そのため、分類基準を他の評定者と再考し、より適切な分類方法がないか検討する必要がある。研究2においては、声かけの各条件に関して、あくまで1事例ずつの結果から解釈しているため、本研究で得られた結果が幼児の一般的な心理的傾向を表しているとは言い難い。そのため、今後はさらにデータ数を増やして、大人による声かけの違いによる幼児の向社会的行動のあり方について検討する必要がある。また、レゴブロック遊びの中で声かけを行った人物とインタビュー調査を実施した人物が同じであったため、インタビュー調査において幼児の素直な回答を得られたかは疑

問が残る。そのため、今後の調査においては、声かけを行う人物とは別にインタビュー調査者を設定する必要がある。

また、幼児期は自己抑制のみならず、自己主張をも育む時期でもあるが(柏木, 1988), 特に研究2で検討した向社会的行動は自分の欲求を抑制する側面が強かったと言えよう。しかし、自己欲求とのバランスの中で自己抑制が生まれると考えるならば、今後自己主張の側面にも注目した検討も必要であると考えられる。

付記

本論文の執筆に際して、実験および調査にご協力いただきました保育園の諸先生方ならびに園児の皆さんに心より御礼申し上げます。

文献

- Eisenberg, N. (1992). *The Caring Child*. Harvard University Press. 二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子(訳)(1995). 思いやりのある子どもたち. 株式会社 北大路書房.
- 長谷川真理子(2001). 進化心理学の展望. 科学哲学, 32(2), 11-23.
- 石橋尚子(1992). 幼児の分与判断と分与行動に及ぼす動機の効果. 心理学研究, 62(6), 342-349.
- 柏木恵子(1998). 幼児期における「自己」の発達. 東京大学出版会.
- 川島一夫(1980). 幼児の寄付行動の学習における帰属の影響. 教育心理学研究, 28, 256-260.
- 菊池章夫(1983). 思いやりの心理. 永野重史・依田明(編). 発達心理学への招待6 ひととのふれあい. 新曜社, pp.74-90.
- 菊池章夫(1984). 向社会的行動の発達. 教育心理学年報, 23, 118-127.
- 松永あけみ・大久保沙織(2012). 幼児の他児認知に及ぼす保育者の言葉かけの影響(1). 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 61, 189-199.
- 長濱成未・高井直美(2011). 物の取り合い場面における幼児の自己調整機能の発達. 発達心理学研究, 22(3), 251-260.
- 大久保英哲・岩崎裕香(2007). 幼稚園に於ける保育者の役割についての研究—保育者の言葉かけが幼児の遊び行動に及ぼす影響—. 教育工学・実践研究, 33号, 31-42.
- 清水由紀(2010). 幼児・児童は危険回避行動と向社会的行動のいずれを優先させるか—安全教育のデザインのための基礎的研究—. 発達心理学研究, 21(4), 322-331.
- 鈴木亜由美・子安増生・安寧(2004). 幼児期における他者の意図理解と社会的問題解決能力の発達—「心の理論」との関連から—. 発達心理学研究, 15(3), 292-301.
- 利根川智子(2006). 幼稚園4・5歳児の対人葛藤解決. 会津大学短期大学部研究年報, 63, 93-98.

A consideration on adults' attitude to promote preschool children prosocial behavior

Sara HASEGAWA
Kyushu University
Kumiko INOUE
Seinan Gakuin University

The research examined factors promoting prosocial behavior among preschool children. The purpose of the first study was to classify prosocial behavior of preschool children according to their motives. Accordingly, three categories of behavior were found: extrinsic prosocial behavior, intrinsic prosocial behavior, and prosocial behavior with conflicts. There were several indications that conflict situations play an important role in the development of prosociality in preschool children. The second study probed the effects of differences in words used by adults in the promotion of prosocial behavior in conflict situations. Two types of adult verbal communication were classified: "empathic communication", which signaled empathy with a child's feeling, and "instructive communication", which called for a child to follow a request made by adult. It was found that all the children showed positive emotions towards "empathic communication", whereas a child who was known for his prosocial behavior did not show positive emotions towards the "instructive communication". The results of this study suggest that empathic verbal communication could promote prosocial behavior.

Keywords: preschool children, prosocial behavior, promoting factor